

地域振興と学生のキャリア計画を促す プログラムの開発のための基礎的な研究

Basic research for the development of programs that encourage community development
and student career planning

石井 雅幸¹, 井上 淳², 落合 千裕³, 磯部 聖子³, 今瀧 毅⁴

Masayuki Ishii¹, Jun Inoue², Chihiro Ochiai³, Seiko Isobe³, and Takeshi Imataki⁴

¹大妻女子大学家政学部児童学科, ²大妻女子大学比較文化学部比較文化学科,
³大妻女子大学キャリア教育センター, ⁴大妻女子大学北海道美瑛町まちづくり推進課

キーワード：女子学生, キャリア形成, 地域振興, 就農支援

Key words : Female students, Career development, Community development, Farming support

1. 研究目的

我が国の地域格差の一つの大きな要因として、農業の実態があり、そのことは食料自給率の低下という形でも表れている。農業の振興が地域の振興にもつながると言える。

また、世界の若者に比べ、我が国の若者は、将来に明確な意図をもって就労していくと言う意識が低い傾向が見られる。そのことにより、高収入で、安定性、継続性を求めて仕事を選択する傾向が強いといった調査結果が報告されている。

こうした状況の中で児童学科の学生を見ると、児童学科の学生は、将来教員や保育士になることを考え、入学してくる学生が多い。将来に対する仕事のイメージをおぼろげながらもってはいても、どのような教員や保育士になりたい。あるいは、教員や保育士になってどのような仕事ができる自分になりたいといった明確な自己のキャリア像をもち得ていない学生が多く見られる。その結果として、学びを深める中で、自らの学びの意義を見失っていく傾向も見られる（児童学科学生の学びの意欲変化傾向の結果 2019）。すなわち、大学に入学するまでに自らの生き方をじっくりと考え、そのために今何を行うのか、そのために今行っていることの価値を自ら考え行うといった学びのあり方を獲得してこなかったことに起因するとも考えられる。違った側面から見るとリアリティーショックという側面も見られる。その点を考えると、あたかも自分の将来の職業を教員や保育士といった児童学科の学生は、前述してきた多くの我

が国の若者層と同じ傾向を持っているともいえる。

本学の全学共通科目で行われているCDPの科目では、シラバス中に以下の目的をあげている。今日、個人にとって職業を通じて自己実現を図ることはますます重要になっており、いかにして自分の職業キャリアを形成していくかが重大な関心事となっている。ところで、キャリア学習といえは外国語やコンピュータのスキル等を身につけること、または資格を取ることだと誤解されやすいが、それらはキャリア学習のうちの目に見えやすい、ほんの一部分にすぎない。自分の理想のキャリアを歩むためには職業能力を磨くことのほかに、問題を発見し、主体的に取り組もうとする意欲、問題解決案を企画する力、そして上司や同僚などの周囲の人々と協働するチームワーク力やコミュニケーション力などが求められ。そこで、この授業では、企業や地方自治体と提携し、それらが直面する実際の課題に対して本学学生がチーム単位で取り組み、課題解決案、企画案を提案するというプログラムを設定し、それを通じて履修者の「汎用的能力」（本学ではこれを「就業継続力」と呼んでいる）を実践的に育成することをねらいとしている。履修者が本授業を通じて、組織においては能力や価値観の異なる個人のチームワークによって仕事がなされていることを推測できるようになると同時に、仕事をうまく遂行するためには「汎用的能力」が重要であることを体感的に学び・理解すること、さらに、実際に汎用的能力のいくつかを向上させることを目標としている。

シラバスにあげる目標に迫るだけでなく、自らのこれからの生き方を考える機会をつくることにより、自らが考え生き方に基づいたキャリア開発、汎用的能力としての生きる力、学びに向かう力を獲得できると考えた。

本研究が考えるようなプログラムは、これまでの本学の CDP には見られず、他大学で行われているキャリア教育の中でも管見の限り見いだすことができなかつた。

本研究では、本学全学共通科目である CDP において、学生自らが自らの今後の生き方を考える場として、北海道美瑛町が抱える新規入植者増加の一方策としての新規就農者募集企画プログラムを考えることを行い、美瑛町が抱える課題を真正面から受け止め、そのための手立てを考えるプログラムの可能性、方向性を見いだし、学生の新たな形の CDP カリキュラムの開発ができるのかを検討することが目的である。

本研究は、先述したようにこれまでの CDP の課題では、ディプロマポリシーの 2 (技能), 3 (思考) にせまることを大きなねらいとしてきたが、それにとどまらずディプロマポリシー 4 の生き方を考える側面に迫ることを大きな目的としている。このことにより、新しい形の CDP の開発ができると共に、新しいアクティブラーニングの姿を見い出すことができ、他の科目の授業改善の一方策として提言できる可能性があると考えている。

2. 研究実施内容

本研究では、2021 年度の CDP の科目において連携先の北海道美瑛町が抱える人口減少、流入人口の減少の解決策を考える提案を本学の学生が行うことができるのかを明らかにするための基礎的な検討を行うための情報収集と得た情報に基づく検討を行うことである。その結果として、本科目の実施可能性を見い出すことができれば、2021 年度 CDP 科目の依頼企業等の一つとして北海道美瑛町を取り上げ、美瑛町と緊密な連携のもとでの科目実施を行っていくことを考えている。

そこで、具体的には北海道美瑛町の課題を明確にするための情報収集並びに、現地を訪問して収集した情報に基づく現地の実情を観察したり、現地の方へのインタビューを行ったりして、課題とその解決策を明らかにする。その上で、解決策の提案を本学の学生でどこまでできるのかを検討して、CDP の科目の中での取り上げて行くことがで

きるのかを明らかにする。さらに、できる可能性があった場合には、どのくらいの計画や費用が必要なのかを明らかにして、美瑛町の予算や本科目のシラバスにどのように反映をしていくのか、学生の負担はどの位になるのかを明らかにする予定であった。そのために、以下のようなスケジュールでの研究を計画していた。

- 4月～5月 北海道美瑛町と計画検討会の実施 (東京と美瑛にて)
- 5月～6月 北海道美瑛町並びに東京美瑛会との打ち合わせ、情報収集(東京にて)
- 7月～8月 収集情報に基づく現地観察視点を明らかにする
- 9月～10月 美瑛町への現地視察
- 11月 CDP の企画作成
- 12月 CDP の実施可能性の検討
- 1月 シラバス作成
- 2月～3月 次年度 CDP カリキュラム実施計画作成・進行
- 4月 CDP 履修学生の募集 決定 現地視察の学生への告知
- 9月～ CDP の授業開始

3. まとめと今後の課題

2019 年度末から新型コロナウイルス感染拡大防止のための処置が講じられたために、2020 年度ははじめから予定していた北海道美瑛町との打ち合わせ並びに現地での調査活動を一切行うことができなかつた。北海道美瑛町から担当者が 2 回東京を訪問した際に今後お打ち合わせを行うことはできたが、それ以上の研究を深め、成果を出すことが一切できなかつた。

2021 年度の CDP 科目は美瑛町との連携が決定しており、2021 年の前半に 2020 年度に予定していた研究を進めて、成果を出すことが求められている。

4. この助成による発表論文等

本研究に関わる雑誌論文投稿、学会発表、図書の出版を一切行うことができなかった。